

面
剛
仁
沿
つ
て
小
り
か
南
流
い
て
い
失
。

■近年、『若草伽藍』が二度にわたって調査された。概要は次の通りである。

①若草伽藍址の発掘調査が最初に行なわれたのは、昭和十四年十二月のことだった。

- その結果、そこに、寺院の焼跡が認められた。
- そして、南北の中軸線上の南側に塔、北側に金堂を配置する『四天王寺式』と呼ばれる伽藍の存在が明らかになった。(第29図参照)

●しかしながら、『四天王寺』では確認されている『講堂』や『回廊』の址は見い出せなかった。

②若草伽藍址の再調査が、昭和四十四年、四十五年の二年間にわたって行なわれた。

- こうして、多くの興味深い事実が判明したものの、……講堂や回廊の址は、今度も発見されなかった、……という。(聖徳太子「上原和、講談社、二二頁、一五〇頁。他参照。第七十章「推古朝の寺院・仏像」において詳述したい)

※二度目には徹底的な調査を行なったと思われるのに、やはり講堂や回廊の址が確認出来なかったというのだから、多分若草伽藍が焼失した時には未だ、『講堂』および『回廊』が存在していなかったのだらう。

①それにしても、推古朝創建の若草伽藍が『天智九年』に

炎上し、その後西院伽藍(現法隆寺の「金堂」・「五重塔」を中心とする伽藍)が再建されたとする説によると、『推古朝創建の若草伽藍』には、『講堂』や『回廊』が無く……(推古朝に創建されて四〇〜六〇年ばかり後の)天智九年(六七〇)四月三十日災禍の時点においてさえ、『講堂』および『回廊』が未だ造られていなかった」という解釈をせねばならないように思われる。

*仮りにその通りだとすると、
《若草伽藍は、「講堂のみならず回廊も無い」ずいぶん「異様な寺院」だった》
ということになる。

②もしかししたら、推古十八年(六一〇)四月三十日当時、若草伽藍は建設継続中であって、金堂や塔をぐるりと取り囲む回廊は堂塔築造の際の障害(邪魔)になるので着手されておらず、講堂も未着工だったのではなからうか。

■恐らく、
《講堂や回廊の建築を開始する直前に、(すでにほぼ完成していた)金堂と塔が炎上し、それ以降の工事全てが中止になった為、いわば当然ながら、——若草伽藍址を二度発掘調査しても、『講堂』や『回廊』の址は見い出せなかったのだらう》



■そこで、
《大和国の『斑鳩寺』は、『法隆寺』とも呼ばれることになった》
と推察される。

*なにしろ、『法隆寺』と『斑鳩寺』の両方の寺の本尊が安置されているのだから、
《どちらの寺名で呼んでも正しい》
と解されたように想到される。

■聖徳太子によって創建された『当初の斑鳩寺』(若草伽藍)が、何時炎上したのかについて、違う角度から考察してみよう。(第10表参照)

■この寺が焼失した年代の確証は無く、
(1)推古十八年四月三十日焼失説(補闕記)
(2)天智九年四月三十日焼失説(日本書紀)
のみならず、数多くの異説が提示されている。

●今日では、天智九年焼失説を支持する人が多いものの、それを決定づける資料は乏しい。(法隆寺) 間中定泉・高田良信、学生社、一七頁。他参照)

③ここに、若草伽藍の西側を南流する小川(川幅約八咫、深さ三咫)を埋め立てることが企図された。④とはいうものの、何の対策も行なわぬに小川を埋め立てたら、川の水が氾濫して危険である。そこで先ず、若草伽藍の少し上流の所(分岐点)から西南方向へ向う溝(幅約八咫、深さ二咫)を掘り、川の水をこの溝に流した。⑤元の小川の分岐点以南は埋め立てられていた。元の小川の埋め立て工事の際、若草伽藍建設時の削りくずや土器片などがまぎれ込んだようである。若草伽藍の建築部材の削りくずと思われる木片が出土しており、出土した土器の年代などから七世紀前半の若草伽藍造営のたぬに埋められ小川とみられている。なお、へ口土器の年代の七世紀前半と、日上宮聖徳太子伝補闕記の「庚午年(推古十八年西暦六一〇年)四月廿日夜半、有災斑鳩寺」の記事とは、まさしく符号している。

大正1660

「元の」 20頁 6行

改行

改行

3,638^p

い
た
と
い
う
こ
と
か
分
か
つ
た
と
判
明
し
た
。

判明 P
④3630
12行
合はた

24

蛇足ながらあえて述べると

＊左を、当初の斑鳩寺（若草伽藍）建築中と並行して埋め立て工事が行われたようであり、削りくすのみならずに土器もまた斑鳩寺炎上以前のものに見えるべきであろう。

⑥小川の埋め立て工事が完了した時、若草伽藍推定回廊西方部分の元の小川の埋め立て土の上に、丸柱の柵列が設けられた。

●現在の南大門から約百廿北東の鏡池あたりが分岐点と見られ、この近くの丸柱三本のうち二本はほとんど腐っていったが、一本の高さ五十センチ、直径二十八センチの柱根が残っていた。

●なお柵列は、昭和五十七年十月に見つかった若草伽藍の北側の柵列と直角に交わり、ほぼ同じ規模であることから同伽藍の西端を示すものと見られていた。また、若草伽藍の東端は飛鳥時代に川が流れていた大宝蔵殿の東築地とさわれており、若草伽藍の東西の規模は西百五十八センチだったと考えられる。

●南端は現在定かでないものの、伽藍の中軸線が西端から三分の一の位置にあるなど、古代寺院の配置と同

蛇足ながらあえて述べると

欠二水

1980年
分断

ぶんたん 1980
分断 分ちまること

3.639

かす
探む 僅6Yにわ

よなか
夜半
156年2年

⑦ ところか、若草伽藍築造金中の推古十八年
(天一〇)四月三十日の夜半、失火によって金堂・塔が共
に炎上した。若草伽藍築造は中止さう。
● 川を埋め立てた土の上の柵列は次第に腐水
強制的に流水を変えられた小川の水が何も知
らぬ氣に流れていったことであつたらうか。
⑧ さて、それはあるいは聖徳太子薨去後の
でないか、あるいは推古朝後半のこと
であつたと解される。巻頭の第10表参照。
● 若草伽藍の西北方に斑鳩寺(西院伽藍)の建
立が計画された。しかしながら、先に述べた小川の
上流域がこの西院伽藍の区域の東北隅を掠め
ており、下流域は境内を東西に分断していった。
● そこで、この小川の上流で流水を変え、西
院伽藍を掠める小川、並びに若草伽藍西方に
掘られた溝を埋め立てることになった。
⑨ 若草伽藍西方の溝の埋め立て工事の際、若
草伽藍様式の瓦や、焼けた木片が混入した。
● 溝の中からそうした物が見出されたという
⑩ このような結果から言つて、
● この溝が下若草伽藍焼失後に埋め立てら

建設が未だ続行中であつた

れた

ということは明らかである

● 小川の上流域もまた埋め立てられ、整地され、ここに斑鳩寺の西院伽藍が建設された。

● つまり、小川の上流域の川底が、西院伽藍の下を通っており、小川が埋められたのは西院伽藍建設に伴う整地のためとみるのが妥当であらう。

● すなわち、要約すると、埋め立てられた一本の小川の上流域の川底が西院伽藍の下を通っており、同時に

に埋め立てられたと考えられる下流域の溝の中から若草伽藍様式の瓦や焼けた木片が出土した

というのである。

● 小川のことから、西研究所は、若草伽藍焼失後に西院伽藍が建てられた

のは間違はなく、両伽藍の併存などを主張する非再建説は成立の余地がない

と結論づけた。

なお、この小川の埋め立て時期が土器片な

年代

3.640^{P-75}

新PA01256¹
「今後の究明を待たい」

290^{1/4}
新PA01-256¹ な

どによつて特定出来るならば、現在の法隆寺
(西院伽藍)の建設時期の見当がつく訣であ
る。
かたつては分らない。
●今後の究明が待たれる。(既述)

米

12.5
Q.M.
12.5
Q.M.

推古朝末頃なのか天智九年以降なのか

だいたいの

3,640^P-3/5

こ

法隆寺国内最古の壁画片(七世紀初め)

奈良

県斑鳩町教委が、次のように発表した。

下「朝日新聞」平成十六年十二月二日付

同、平成十八

年(二〇〇六)六月二十八日付「壁画片」新たに80点(参照)

(1) 法隆寺の南大門の東南約三〇メートルで

約一一〇平方メートルを発掘したところ、地下約二

メートルの二〇センチメートルの層から、七世紀初めの

彩色された壁画片約六〇点が出土した(写真参照)

・一、緒に出土した焼けただれた瓦は、七世紀初めの

飛鳥時代の様式だった。

(2) 壁画の破片は一千度以上の高温にさらされ

たことが分かり、創建法隆寺(若草伽藍)の

焼失を裏づける有力な物証となった。

(3) 壁画は屋内に描かれるものだから

へ創建法隆寺(若草伽藍)は建物の内部まで

高熱で焼き尽くす大火災に見舞われた

と推測される。

原

遺

36291

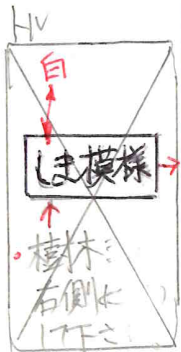
の内部まで

5p163640P

- ・カラー
- ・頁の上半分に、限度一杯はみ出して掲載下さい。

3,640P 4/5

背景を白にしておいて下さい。(ヨゴレをトル)



奈良県斑鳩町の中宮寺の国宝・天寿国續帳の一部



スカートのしま模様?

樹木?



絵因果経(8世紀、奈良国立博物館所蔵)の一部

13QG

14QG

写真図版 639

わかさ かん 第29回

若草伽藍址近傍で出土した多数の壁画片

『朝日新聞』平成18年(2006)6月28日付、
＜炎くぐった貴重な色彩＞＜樹木・スカート?＞参照。

天つき
改行

3,640^P-5/5

とが期待されるのではなからうか

取り上げられたい透し彫り
遺物(谷)の中からは、今後とも、大光背、外周縁に
小川や溝(谷)の中からは、今後とも、大光背、外周縁に
へ西院伽藍造営に先立って埋め立てられた

とくまた、線の描き方が、現法隆寺の金堂壁画
と比べて古風で、一時代前のものと分かる
という。

(6) 今回見つけた壁画片の図柄は小さいよう

きい。
失を裏付けする考古遺物が発掘された意義は大
火災を疑う主張の根拠にもなっていない。焼
か(5)若草伽藍址では焼けた瓦の発見が少なく、
とみていい。

斑鳩町教委は、
へ焼け残った瓦礫をこの谷に捨てた
だった。

(4) 出土場所は、若草伽藍の金堂と塔の中軸線
から西約一〇〇メートルで、当時は深さ約三メートルの谷

壁面片の

所因70図、法隆寺内中堂社54月
紀下556^{注3}
③3628-1/2 紀下250^{注3} 紀下1750^{注3} 紀下187^{注3} 3,641^{注3} 藤上94^{注3} ③3504^{注3} 紀下177^{注3} 紀下556^{注3} ③3716^{注3}

斑鳩宮
東側に位置してゐる斑鳩宮（法隆寺西院）の
創建、及びその後の概略の経緯について見て
おくことにしよう。（以下第446図法隆寺境内平面図参照）
斑鳩宮の創立の年時に関する資料は、極め
て少ない。
①推古紀九年（六〇一）二月条に、
皇太子、初めて宮室を斑鳩に興てたまふ
②聖徳太子伝暦、推古十三年（六〇五）条に
「冬十月。太子遷于斑鳩宮」
③推古紀十三年条に、
「冬十月。皇太子居斑鳩宮」
とある。
なお、法隆寺東院の伝法堂地下から発見さ
れた遺構について、次のように述べられてい
る。
「先年、東院の修理の際、舍利殿の
絵殿と伝法堂付近の東西約三〇呎、南北約三
三呎の広さの地下調査が行われ、大小八棟ほ

均等
この面
1/6

どの長方形平面の掘立柱の建物跡と、井戸
ニか所が発見された。

この大小の建物は、多く平面がくい溝つて
いるから、二時期の建物の跡が重なったもの
と思われる。

（六〇一〜六四三）

奈良時代の所伝のよう、ここに斑鳩宮の
跡とすれば、その存続の四十年ほどの間に一
度改築したことになる。かっただとはいえ
調査された地域では南北方向の建物が多
宮の寝殿に相当するものでなく、付属建物

の一部と見られている

という。（「日本書紀」下）日本古典文学大系
岩波書店、五五八頁、補注二一―三参照）

推古紀二十九年（六二一）二月五日条には
「半夜に、厩戸豊聰耳皇子命、斑鳩宮に夢
りまゝぬし

とある。（追って考察したい）

皇極紀二年（六四三）十一月一日条に、

「蘇我臣入鹿、小徳巨勢徳太臣・大仁土師
娑婆連を遣りて、山背大兄王等を斑鳩に掩は

次頁
から

宮を焼く。云々
とある。
（中略）
巨勢徳太臣等、斑鳩

＊そこで、

聖徳太子没後は、その子山背大兄王等が

斑鳩宮に居住しておられた。

一かゝ皇極二年、斑鳩宮が焼失し、山背

大兄王等は、斑鳩宮の西方の斑鳩寺に法隆

寺に入つて自殺した。若草伽藍もくは西院伽藍

と考えられてゐる。（『日本書紀』下）日本古

典文学大系、岩波書店、一七七頁、注二二。

同五五六頁、補注二一一三参照）

前頁

法隆寺
周中、高田
451 3716
日本社
661 此巻
行信
3716
5斤

法隆寺「間中定衆・高田良信」学生社 四五頁

日本書紀上中下と見て分信。
鵜 77
鵜聖徳王宮 無。
同 3716-1/3

④

天平年間

僧行信等は斑鳩宮跡の荒廃をな

げ、ついでに仏堂を造る運動をおこし、やがて上宮
王院を造営した。靈異記に大和国鵜聖徳王宮

と記すのがこゝで、今の法隆寺東院であり、
中心の仏堂を夢殿とよぶ。〔日本書紀下〕日

本を典文学大系、岩波書店、五五六頁注三

法隆寺「町田甲一」時事通信社「四」三四九、三五〇頁

皇極二年（六四三）十月一日

斑鳩宮は、一字残らず全焼した

と解され、かちであるか、――かし、

夢殿の前身にあたる建物は焼けなかったと伝

える書物がある、という。（「法隆寺」町田

甲一、時事通信社、三五一頁参照）

け、水とも、こゝで述べると煩雑になるので、

第七十章「斑鳩宮の焼失」の項において詳述

たい。

*

斑鳩寺(若草伽藍)の創建から炎上に至る経緯について

等与刀弥々大王が、王位を返上して皇太子になられたのは、推古十二年(六〇四)の年頭のことであつたかも知れない。(第六十九章へ天皇の着衣を身につける聖徳太子像の

項において既述(巻頭の第10表参照)

●なるほど明瞭でとは分らないが、この

物語においては、

へ推古十二年正月一日頃、等与刀弥々大王

は、二朝有るべからずとの信念のもとに

自ら大王の位を退き、太子になられたの

で、あうう✓

と解してみたい。(後述)

同年の推古紀十二年(六〇四)四月三日条に

皇太子、親ら肇めて憲法十七條作りたま

31

所信 1121
信じている事柄

紀下
180' 5
ひつぎのみ:

3504 14p 付
3505

亀井 174
藤原(正) 94

いっかく 2
一廊 129
3502 1/2

田田 179
3.644 1/2

次頁 2行

114

114

馮^{たの}みて、天下^{てんか}の萬機^{ばんき}を日夕^{にっせき}に下行^{くだり}ふ。

(中略) 太子^{たいし}此^これより後^{のち}、旦^{あけ}には黒駒^{くろこま}

に騎^{のり}りて入りて政事^{せいじ}を奏^{そう}し、竟^{きは}れば即^{すなは}ち宮^{みや}

(斑鳩宮^{いかるがのみや})に還^{かへ}り給^{たま}ふ。日^ひ々に闇^{ひま}無^なし。時^{とき}

の人^{ひと}えを異^いとす

と記^きされていゝる。ありであらう。(第六

十七章へ用明天皇^{ようめい}退位^{たいい}の項^{こう}において既

述^{述べ})

あるいは、推古^{すいこ}十三年(六〇五)十月に斑^{いかるが}

鳩宮^{ののみや}へ遷^{うつ}られた聖德太子^{せいとく}は、この斑鳩

宮^{みや}内の一廊^{いっかく}に、仏堂^{ぶつどう}のごとき小堂^{しょうどう}を建てて、

日夜^{にちや}拜^{はい}しておられたのではなからうか。(「法

隆寺^{りゅうじ}」町田甲一、時事通信社、一七九頁参

照)

と、いうのは、まだその時、仏寺^{ぶつじ}曰^{いは}「当初^{しうしゆ}の

斑鳩寺^{いかるがでう}は(若草伽藍^{わくそうがらん})の起^{おこ}来^きさえも存在^{そんざい}して

いなかたであらう、と思^{おも}われるからであ

る。

なお、斑鳩宮^{いかるがのみや}内にあつたらうと思^{おも}はれるそ

の小堂^{しょうどう}は、

後代^{こうだい}の「夢殿^{ゆめどの}」

3504
3505
あは

→

⑦ 3650°

ser! ② 3650⁰ 8375

3,645^P

③ $3644^{\circ} - \frac{1}{2} 459$
HIV

コクヨ ケー20 20X

171

に相当するものであったかも知れない。
 尚、夢殿について、追って述べることには

⑤ $3644^b - 1/2$
14行
17条の電法

（こ）

あいまい
曖昧 66

（こ）

この二冊は
是 474
紀下188 3,646 P

3885
3886

紀下188
上層50

せんきょ
遷居 1261 P
住所を移したところ

前
145
において
述べた

364
1/2
紀下186

聖年
よくとく

わち現在の^{いかるがのみや}大和国の^{せんきょ}法隆寺の^{すい}名がみえるの
は、聖徳太子が斑鳩宮へ遷居された推古十三年の
推古紀十四年（天の元）条においてである。

こう記されている。

七月、天皇、皇太子を請せて、勝鬘経

を講かゝれたまふ。三日に説き竟へつ。

是歳、皇太子、亦法華経を岡本宮に講く。

天皇、大きに喜びて、播磨國の水田百町を皇

太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたま

ふ。

とある。以下巻頭の第10表参照

一見したところ、この文をザッと読むと

「推古十四年七月に聖徳太子は勝鬘経を講

ぎ、是歳（推古十四年）中に聖徳太子は、

亦、法華経を岡本宮で講かれた。云々」

といった意味のことを述べているように思われる。

日本書紀の日本書紀文学大系、岩波書店、八頁注十一「岡本宮」

「か」なから、どことなく変である。

① 日七月と具体的な月を記載した直後に、

曖昧に「是歳」と記述しているのはおかしい

② 七月条には、皇太子が何処で勝鬘経を

講かれたのかか述べられていない。

林907
請めく

3604-3/4

3,647

3604-3/4

上原和51P
藤原上13

天皇、皇太子を請せて、勝鬘經を講か
めたまふ
と記されているのだから、
推古天皇は、皇居に聖徳太子を招い
て、勝鬘經を講かめたまうた
と解すべきなのかも知れない。
ともあれ、同様のことを引き続いて述べて
いるのに、曰七月条と曰是歳条とは対に
なっているわけでもなく、奇異な感を受ける。
あるいは、先に、第七十章へ西の曰法隆寺
東の曰斑鳩寺の項において引用した曰法隆寺
王帝説に推古六年条の記述を絡ませて解説す
べきなのかも知れない。
・ちなみに、いま一度引き返してみよう。こ
う述べられている。
戊午年（推古六年）四月十五日 少治田天
上宮王を請せて勝鬘經を講かむ。其の
儀僧の如し。諸王公主及び臣連公民信受て嘉
ばざるなし。三箇日のうちに説き訖りぬ。天
皇聖王に播磨国揖保郡佐勢地五十万代を布施
したまひき。聖王即ち此地を以て法隆寺の地
と爲したまひき。今播磨にある田三百余町なり

極55

とある。

ここと

① 五 法王帝説に推古六年四月十五日条の
勝鬘經の講経(三箇日)で説き訖ったというのと、

② 日本書紀に推古十四年七月条の勝鬘
經の講経(三日)で説き竟えたというとは、

全く同一のことを指してゐると考えてみたい。
一方は推古六年四月十五日条

であり、他方は推古十四年七月条で
あつて、年・月共に異なつてあり、
一のこととは考えにくい。

しかし、この解釈することか出来ようか。

七月

諸王公主及び

かつて(推古六年四月十五日に)推古天

皇は、皇太子(その当時、実は東の日辺日本

国の大王)を請せて、勝鬘經を講かゝり、

うた。其の儀僧の如く、并古は爽やかで、臣

連公民信受て嘉はさるなく、わが三日間

説き訖った。推古天皇は、聖王(等与刀弥々

大王)に播磨国揖保郡佐勢地五十万代(今播

磨にある田三百余町)を布施された。聖王(

⑦3644^P ⑦3604^{P-3/3} 3,649^{P-1/2} ⑦3885^P ⑦3646^P ⑦3646^P

等与刀弥々大王は即ち此地を以って、大倭

国（肥後国）の法隆寺の地と為さ小た。

●そして同様に是歳（推古十四年七月以前）

皇太子（日刃日本国）の大王位を返上して太子

の身分となられた聖徳太子は亦法華經

を岡本宮（大倭国）に於て講經

された。推古天皇は、大さにお喜びになつて

播磨国の水田百町を皇太子に施したもうた。

●因つてこの月、つまり推古十四年七月に

播磨国の水田百町を、大和国の当初の斑鳩

寺（若草伽藍）に納れたもうた。

という意味なのであらう、と推察される。

●それによつても、ここに注目されることがある

●推古天皇が布衣された水田について、

(1) 法王帝説は推古六年四月十五日条には、

「田三百余町を法隆寺の地と爲した」

(2) 日本書紀は推古十四年是歳条には、

「水田百町を斑鳩寺に納れたもうた」

と記されており、水田の広さに大きな違いが

あつた。少くともどちらかが誤つて水田の広さを記

諸経(二つ取り) ③3648 4行 ④3649 1/2 6行

接+紀14行 ⑤3646 5行へ

⑥3648 16 3,649 2/2

「あえて」この頁11行

と懸念されるや

へ聖徳太子の物語が「どんなに巧みであ
ったと」一「も」推古十四年(六〇六)七月以
降の短い期間内に「下」日勝曼経「(三日間)」お
よび「日法華経」の講経を聞いた「う」普
通の人々は「思考」が混乱して「よく理解出来な
い」と懸念されるや

いわずもがなのことながら、
日本書紀に「記載」されて「いる」文頭の「日
付」には、充分注意しなければならぬ。
と思われ。
一連の経緯を「こまごまと書き綴」って「いる」話
の中のどの時点の年月日が「文頭に付」されて「い
るのか」分りにく「い」からである。
日本書紀の編纂者達は

へあえて「紛らわしく述べ」る「読者の解釈
を誤」った方向へ「導び」こう「意図」して「不明瞭な文面に仕立て上げたの
だろう」。

さらに、

元 2042² (1162) 法王帝説 364⁹
法華經 (ほけきやうてい) 3885⁹

上原和51⁹
1162⁹

隔て 1993⁹ (1162) 事柄 814⁹ 3,650⁹

500A=1町歩
50,000=100町
500,000A=1000町
3645⁹ 3645⁹

3606⁹ 中

述したとも解せようが、
語では、両方共正しい、と解したい。
・つまり、
(1) 推古六年に布施された日田三百余所は、
用明天皇の誓願になる大倭国の日法隆寺の
地と為された。
(2) 推古十四年に布施された日水田百所は、
大和国の斑鳩宮の近くに建立したいとお
考えの仏寺(若草伽藍)に納めたもうた。
と考えたい。
すなわち、日本書紀の編纂者達は、この推
古十四年条においてまた、
八時を隔てた二つの事柄を、
合わせて、あたかも一つのことにように記述
したのであろう。
と想像される。
なお、聖徳太子の伝記として信憑性も高
く、日本書紀の太子関係記事を補正するもの
とみられている日法王帝説では、先に
述べた通り、戊午年(推古六年)四月十五
日に日勝鬘経だけか講じられたことになっ
ており、日法華経の名はみえない。
参考までに述べると、

条里制「時の尺」②読売218P
上原和 26P " 巻末の日本地図

3,651P

③3604P-3/4表
④3617-3/3

かんあ人 元 483
勘案 考え合せのこと
上原和 51P, 47P末35P

聖武天皇の天平十九年に勘案された日法隆寺伽藍縁起并流記資財帳ににおいては、日勝推古六年（五九八）の四月十五日に行われたことになったという。（「聖徳太子」上原和、講談社、四七頁、五一頁参照）

＊

もうまもなく定かでないが、この物語に

おいては、

人推古十四年（六〇六）七月ころ、斑鳩宮の西方すぐのところにて、当初の「斑鳩寺」（若草伽藍）が造り始められたのであろうと考えてみたい。（巻頭の第10表参照）

■なお、この当時、斑鳩あたりには古い地割法による条里制が存在していたという。

●条里制は、日本耕地の区画法であって、これは必ずしも東西南北が基準とされるわけではなく、その地の地形に応じて便利のように区画されたものである。

トル

かんあ人
考え合せのこと

件随 103
威殺 103
幣害 1984P
居所 584P

3,652P

日本の歴史 読巻218P

3628P-3/2

聖徳太子は、当初の斑鳩宮におよび
当初の斑鳩宮を建てるに当って、以
前からあったこの条里制を尊重されたのであ
ろう。
発掘の結果、
(1) 東院の伝法堂地下から発見された斑鳩宮の
遺跡は、南北の中軸線が磁北から西へ十二度
振れており、
(2) 若草伽藍址の中軸線は、磁北に対して西へ
大きく二十度も振れていった、
という。へ若草伽藍の項において既述
この発掘の成果から言えば、斑鳩宮と斑
鳩寺（若草伽藍）との間に、統一的な配
があつたように感じられない。
二朝の弊害を憂えて、自ら大王の位を返上
された聖徳太子にとって、
へ私的な居所斑鳩宮に付随した寺（若草
伽藍）を作るというのには、昔からある条里制を
蔑ろにして南北を重視し威殺を保つた
などという構想とは思ひもよらないことだつた

ひのわいひ
紀下121°
永平23年

③3632

田代154°
藤原上59°
③3708, 3891, 3994°

3,653^P-1/2

③3632
同文

よなみ
夜半紀下156°
末2行
よなみ
夜中
夜2286°

の~~で~~であらう。

米

こ~~う~~いて、^{は、5 AM}当初の^{いかるがでう}日斑鳩寺^{わがうさ}に^か（若草伽藍）

藍^うの建設が、着々とすすめられてゆき、

— やかて、金堂と塔とが完成した。

• とはいえ、まだ、講堂や回廊は出来ていな

かった。

何^{なん}と^と下^げ、^{それ}飛^{おと}ろく^{ろく}そんな時のことなの^だであらう。

へ^{すい}推古十八年（六一〇）四月三十日の夜半^{よなみ}

斑鳩寺^{いかるがでう}に^{わがうさ}（若草伽藍）の金堂と塔とが、共に炎

上^いした^う✓

ようである。^{（巻頭の第10表参照）}

日^ひ上^か宮聖徳太子伝補^ほ闕^{けつ}記^きに、

「庚午年（推古十八年、西暦六一〇年）四

月廿日夜半、有^{あり}災^{わざ}二斑鳩寺^{いかるがでう}に

と記^きされて^いる。^{（既述）}

また、若草伽藍址発掘の調査結果^{ちゅうさ}因^よついで

は、先に述べた通りである。

だった^で

二良
149

H30(2018)9.18(火)~9.20(4回)
 H31(2019)3.28(木)~3.28(3回)
 令和元(2019)9.5(木)~9.16(3回) 3634-2/3 20年 3634-2/3
 令和2(2020)4.19(日)~4.20(4回) 3634-2/3
 令和3(2021)1.19(火)~1.21(4回)

3634 1199 3634

1/2 F 1/20
 1/9

すなわち「斑鳩寺(若草伽藍)の伽藍配置は、南北線上に金堂と塔とが並び、四天王寺式で、あまは発見されなかつた」という。

金堂と塔はほぼ完成していたが、講堂や回廊の着工以前に、金堂と塔が炎上したものと思われる。(第七章「若草伽藍」の項において既述)

※言わすもかなのことながら、天智九年に若草伽藍が炎上し、その後西院伽藍が再建されたとする説によると、(には)推古朝創建の若草伽藍講堂や回廊、半世紀ばかり後の天智九年(六七〇)四月三日、伽藍に存在していたなかたし、という解釈をせねばならないように思われる。もしもその通りだとすると、かなり奇妙なことになる。

③3607^P ③3656^P 3,654^P - 1/3

③3656^P ③3626^P ③3632^P ③3653^P ③3657^P ③3659^P ③3654^P ③3655^P ③3656^P ③3657^P ③3658^P ③3659^P ③3660^P ③3661^P ③3662^P ③3663^P ③3664^P ③3665^P ③3666^P ③3667^P ③3668^P ③3669^P ③3670^P ③3671^P ③3672^P ③3673^P ③3674^P ③3675^P ③3676^P ③3677^P ③3678^P ③3679^P ③3680^P ③3681^P ③3682^P ③3683^P ③3684^P ③3685^P ③3686^P ③3687^P ③3688^P ③3689^P ③3690^P ③3691^P ③3692^P ③3693^P ③3694^P ③3695^P ③3696^P ③3697^P ③3698^P ③3699^P ③3700^P ③3701^P ③3702^P ③3703^P ③3704^P ③3705^P ③3706^P ③3707^P ③3708^P ③3709^P ③3710^P ③3711^P ③3712^P ③3713^P ③3714^P ③3715^P ③3716^P ③3717^P ③3718^P ③3719^P ③3720^P ③3721^P ③3722^P ③3723^P ③3724^P ③3725^P ③3726^P ③3727^P ③3728^P ③3729^P ③3730^P ③3731^P ③3732^P ③3733^P ③3734^P ③3735^P ③3736^P ③3737^P ③3738^P ③3739^P ③3740^P ③3741^P ③3742^P ③3743^P ③3744^P ③3745^P ③3746^P ③3747^P ③3748^P ③3749^P ③3750^P ③3751^P ③3752^P ③3753^P ③3754^P ③3755^P ③3756^P ③3757^P ③3758^P ③3759^P ③3760^P ③3761^P ③3762^P ③3763^P ③3764^P ③3765^P ③3766^P ③3767^P ③3768^P ③3769^P ③3770^P ③3771^P ③3772^P ③3773^P ③3774^P ③3775^P ③3776^P ③3777^P ③3778^P ③3779^P ③3780^P ③3781^P ③3782^P ③3783^P ③3784^P ③3785^P ③3786^P ③3787^P ③3788^P ③3789^P ③3790^P ③3791^P ③3792^P ③3793^P ③3794^P ③3795^P ③3796^P ③3797^P ③3798^P ③3799^P ③3800^P ③3801^P ③3802^P ③3803^P ③3804^P ③3805^P ③3806^P ③3807^P ③3808^P ③3809^P ③3810^P ③3811^P ③3812^P ③3813^P ③3814^P ③3815^P ③3816^P ③3817^P ③3818^P ③3819^P ③3820^P ③3821^P ③3822^P ③3823^P ③3824^P ③3825^P ③3826^P ③3827^P ③3828^P ③3829^P ③3830^P ③3831^P ③3832^P ③3833^P ③3834^P ③3835^P ③3836^P ③3837^P ③3838^P ③3839^P ③3840^P ③3841^P ③3842^P ③3843^P ③3844^P ③3845^P ③3846^P ③3847^P ③3848^P ③3849^P ③3850^P ③3851^P ③3852^P ③3853^P ③3854^P ③3855^P ③3856^P ③3857^P ③3858^P ③3859^P ③3860^P ③3861^P ③3862^P ③3863^P ③3864^P ③3865^P ③3866^P ③3867^P ③3868^P ③3869^P ③3870^P ③3871^P ③3872^P ③3873^P ③3874^P ③3875^P ③3876^P ③3877^P ③3878^P ③3879^P ③3880^P ③3881^P ③3882^P ③3883^P ③3884^P ③3885^P ③3886^P ③3887^P ③3888^P ③3889^P ③3890^P ③3891^P ③3892^P ③3893^P ③3894^P ③3895^P ③3896^P ③3897^P ③3898^P ③3899^P ③3900^P ③3901^P ③3902^P ③3903^P ③3904^P ③3905^P ③3906^P ③3907^P ③3908^P ③3909^P ③3910^P ③3911^P ③3912^P ③3913^P ③3914^P ③3915^P ③3916^P ③3917^P ③3918^P ③3919^P ③3920^P ③3921^P ③3922^P ③3923^P ③3924^P ③3925^P ③3926^P ③3927^P ③3928^P ③3929^P ③3930^P ③3931^P ③3932^P ③3933^P ③3934^P ③3935^P ③3936^P ③3937^P ③3938^P ③3939^P ③3940^P ③3941^P ③3942^P ③3943^P ③3944^P ③3945^P ③3946^P ③3947^P ③3948^P ③3949^P ③3950^P ③3951^P ③3952^P ③3953^P ③3954^P ③3955^P ③3956^P ③3957^P ③3958^P ③3959^P ③3960^P ③3961^P ③3962^P ③3963^P ③3964^P ③3965^P ③3966^P ③3967^P ③3968^P ③3969^P ③3970^P ③3971^P ③3972^P ③3973^P ③3974^P ③3975^P ③3976^P ③3977^P ③3978^P ③3979^P ③3980^P ③3981^P ③3982^P ③3983^P ③3984^P ③3985^P ③3986^P ③3987^P ③3988^P ③3989^P ③3990^P ③3991^P ③3992^P ③3993^P ③3994^P ③3995^P ③3996^P ③3997^P ③3998^P ③3999^P ④0000^P

町田 151^P ③3657^P ③3658^P ③3659^P ③3660^P ③3661^P ③3662^P ③3663^P ③3664^P ③3665^P ③3666^P ③3667^P ③3668^P ③3669^P ③3670^P ③3671^P ③3672^P ③3673^P ③3674^P ③3675^P ③3676^P ③3677^P ③3678^P ③3679^P ③3680^P ③3681^P ③3682^P ③3683^P ③3684^P ③3685^P ③3686^P ③3687^P ③3688^P ③3689^P ③3690^P ③3691^P ③3692^P ③3693^P ③3694^P ③3695^P ③3696^P ③3697^P ③3698^P ③3699^P ③3700^P ③3701^P ③3702^P ③3703^P ③3704^P ③3705^P ③3706^P ③3707^P ③3708^P ③3709^P ③3710^P ③3711^P ③3712^P ③3713^P ③3714^P ③3715^P ③3716^P ③3717^P ③3718^P ③3719^P ③3720^P ③3721^P ③3722^P ③3723^P ③3724^P ③3725^P ③3726^P ③3727^P ③3728^P ③3729^P ③3730^P ③3731^P ③3732^P ③3733^P ③3734^P ③3735^P ③3736^P ③3737^P ③3738^P ③3739^P ③3740^P ③3741^P ③3742^P ③3743^P ③3744^P ③3745^P ③3746^P ③3747^P ③3748^P ③3749^P ③3750^P ③3751^P ③3752^P ③3753^P ③3754^P ③3755^P ③3756^P ③3757^P ③3758^P ③3759^P ③3760^P ③3761^P ③3762^P ③3763^P ③3764^P ③3765^P ③3766^P ③3767^P ③3768^P ③3769^P ③3770^P ③3771^P ③3772^P ③3773^P ③3774^P ③3775^P ③3776^P ③3777^P ③3778^P ③3779^P ③3780^P ③3781^P ③3782^P ③3783^P ③3784^P ③3785^P ③3786^P ③3787^P ③3788^P ③3789^P ③3790^P ③3791^P ③3792^P ③3793^P ③3794^P ③3795^P ③3796^P ③3797^P ③3798^P ③3799^P ③3800^P ③3801^P ③3802^P ③3803^P ③3804^P ③3805^P ③3806^P ③3807^P ③3808^P ③3809^P ③3810^P ③3811^P ③3812^P ③3813^P ③3814^P ③3815^P ③3816^P ③3817^P ③3818^P ③3819^P ③3820^P ③3821^P ③3822^P ③3823^P ③3824^P ③3825^P ③3826^P ③3827^P ③3828^P ③3829^P ③3830^P ③3831^P ③3832^P ③3833^P ③3834^P ③3835^P ③3836^P ③3837^P ③3838^P ③3839^P ③3840^P ③3841^P ③3842^P ③3843^P ③3844^P ③3845^P ③3846^P ③3847^P ③3848^P ③3849^P ③3850^P ③3851^P ③3852^P ③3853^P ③3854^P ③3855^P ③3856^P ③3857^P ③3858^P ③3859^P ③3860^P ③3861^P ③3862^P ③3863^P ③3864^P ③3865^P ③3866^P ③3867^P ③3868^P ③3869^P ③3870^P ③3871^P ③3872^P ③3873^P ③3874^P ③3875^P ③3876^P ③3877^P ③3878^P ③3879^P ③3880^P ③3881^P ③3882^P ③3883^P ③3884^P ③3885^P ③3886^P ③3887^P ③3888^P ③3889^P ③3890^P ③3891^P ③3892^P ③3893^P ③3894^P ③3895^P ③3896^P ③3897^P ③3898^P ③3899^P ③3900^P ③3901^P ③3902^P ③3903^P ③3904^P ③3905^P ③3906^P ③3907^P ③3908^P ③3909^P ③3910^P ③3911^P ③3912^P ③3913^P ③3914^P ③3915^P ③3916^P ③3917^P ③3918^P ③3919^P ③3920^P ③3921^P ③3922^P ③3923^P ③3924^P ③3925^P ③3926^P ③3927^P ③3928^P ③3929^P ③3930^P ③3931^P ③3932^P ③3933^P ③3934^P ③3935^P ③3936^P ③3937^P ③3938^P ③3939^P ③3940^P ③3941^P ③3942^P ③3943^P ③3944^P ③3945^P ③3946^P ③3947^P ③3948^P ③3949^P ③3950^P ③3951^P ③3952^P ③3953^P ③3954^P ③3955^P ③3956^P ③3957^P ③3958^P ③3959^P ③3960^P ③3961^P ③3962^P ③3963^P ③3964^P ③3965^P ③3966^P ③3967^P ③3968^P ③3969^P ③3970^P ③3971^P ③3972^P ③3973^P ③3974^P ③3975^P ③3976^P ③3977^P ③3978^P ③3979^P ③3980^P ③3981^P ③3982^P ③3983^P ③3984^P ③3985^P ③3986^P ③3987^P ③3988^P ③3989^P ③3990^P ③3991^P ③3992^P ③3993^P ③3994^P ③3995^P ③3996^P ③3997^P ③3998^P ③3999^P ④0000^P

法隆寺の再建、非再建論争

前記の通り

上宮聖徳太子伝補記には、
庚午年（推古十八年、西暦六〇一年）四

月廿日夜半、有^レ斑鳩寺^ニ

と記されている。（第七章八若草伽藍^ノの

項において既述）

図ところか、日本書紀には、

天智九年（西暦六七〇年）四月三十日の夜

かえ後に、法隆寺に災けり。一屋も餘ること

無し。大雨ふり雷震る

と記載されている。（第七章八西の法隆

寺、東の斑鳩寺^ノの項において既述）

米

24/7 吳漢

411.8.26

錯誤·金

上層40138~9

工小抹 1004° 241

錯 大か27.1に8無 (冷害入)

$$3,654^p - \frac{2}{3}$$

9/20

1977

一説に

そこで、
一説に、

ほろろき

かのえうまのとし

① 上宮聖徳太子伝補願記の庚午年（推古

十八年、西暦六一〇年）四月三十日夜半の斑

鳩寺炎上の記事は、
六〇年後

「丁度干支一巡後の庚午年（天智九年、西

暦 天 七 〇 年 巳 四 月 三 十 日 の 火

夜半元後に法隆寺に災けり。一屋も餘り

こ
と
無
し
凸

き
い
ゆ
う

かん
い
ち
ち

とりう 日本書紀の記述を、千支一

いんあやま
《受つておはす
た

7
1
3
4
だ
あ
ろ
う
ー

上	上
言	言
フ	フ
ハ	ハ
ル	ル
ハ	ハ
子	子
。	。
ハ	ハ
口	口
玄	玄
逢	逢
寺	寺
一	一
所	所
田	田
甲	甲
一	一
、	、
時	時

事、言、仕、一、五、四、し、六、負、。、司、一、九、七、負、參、照、)

② 一 方、 金 庫 正 反 計 二、

「庚午年」に当るは、
かのえうまのとし
あ
すい
ニ
五十八年（六一〇年）

[illegible]

震つて
 六十年後の
 庚午年（天智九年）の
 条

昔に入さへたのであらう一

この言われ
て
る
へ
聖徳太子
一上原和

講談社、一三八乙九頁参照)

⑦
し
か
し
な
が
ら (＊)
、
こ
の
物
語
に
お
い
て
は
↑
取
り
の